



1961/ 高知県生まれ

1991/ 筑波大学大学院心理学研究科修了、教育学博士取得

2006/ 第9回 ロレアル 色の科学と芸術賞の金賞を受賞

2014/ 「みる・きく・さわのふしぎ展」 静岡科学館る・く・る

2014/ 「夏休み企画展 なにがミエル?ナニにみえる?」 大垣市ストピアセンター

2015/ 「錯覚体験ふしぎワールド」 名古屋市科学館

2015/ 「脳がびっくり! 錯覚・錯視ふしぎ博物館」 おかざき世界こども美術博物館

2016/ 「光波・視覚」 gallery COEXIST TOKYO

2016/ 「錯視の不思議な世界ようこそ!」 JAGDA Kanagawa 特別講演 横浜国立大学

現在:立命館大学総合心理学部 教授

錯視いろいろ

北岡明佳 (立命館大学総合心理学部)

「錯視は美しい」。私はこのように考えているが、この考え方は私のオリジナルではなく、故野口薫先生のパクリである。また、知覚心理学において錯視研究を行なう場合には、錯視は見えさえすればよいのであるが、「錯視をデモする限りは、最も錯視の強い最適図形を示さなければならない」とも考えている。この信条も私のオリジナルではなく、故今井省吾先生の教えのパクリである。

「パクリ」ではなく「先達の言ったことを継承している」と言えばよいのだが、私は彼らの直接の弟子ではなく、警咳に接したとまでは言えないものだから、遠慮してそう言っている。しかし、私は両先生の教えを最大限に活用して、錯視研究と錯視デザイン作りに役立てているので、この点だけに関して言えば、私は彼らの忠実な継承者である。

実は、「イリュージョンの科学とアート展」においては、これらは主要なコンセプトと認識するところと思う。遠慮などしている場合ではないのだ。「錯視はウケてなんぼ」である。ウケるためには、錯視図形が美しいか、あるいは錯視が強くてインパクトがあることが望ましい。私はそれを日ごろから実践している。今回の展示会は、その実情を一般の方に知ってもらえるチャンスの一つである。

私は実験心理学の研究者である。錯視という視覚の現象を研究することが仕事である。このため、視覚の現象を筋道立てて研究するだけでもよい。しかし、錯視は純粋に抽出できているものほど、それを表現する図形は美しくなることから、研究方法の一つに美を追求するという手法が成立する。すなわち、錯視をアートすることで、錯視を研究できるのである。

錯視には、いろいろ種類がある。錯視のデザインあるいはアートの展示を見ることは、とりもなおさず錯視そのものの探求である。錯視は視覚の現象の一部であるから、本展は「見る」とはどういうことかということ、鑑賞者に問いかけていることになる。



R161, G191, B190

R179, G209, B213

イリュージョンの科学とアート展シンポジウム

日時:2017年7月16日 10:00~13:00

会場:熊本県立美術館講堂

講演者と講演タイトル

- 杉原厚吉:明治大学先端数理科学インスティテュート特任教授
「立体錯視効果とその創作法」 10:00~10:25
- 藤木淳:札幌市立大学デザイン学部准教授
「脳内空間の設計(デザイン)」 10:30~10:55
- 山口泰:東京大学大学院総合文化科学研究科教授
「自然画像のための視覚復号型暗号」 11:00~11:25
- 北岡明佳:立命館大学総合心理学部) :教授
「錯視いろいろ」 11:30~11:55
- 篠田守男:筑波大学名誉教授、アーティスト
「構造について」 12:00~12:25
- 星加民雄:崇城大学総合教育センター准教授
「視覚芸術表現要素としての視点位置と錯視効果、その応用展開」 12:30~12:55

北